



Title	低地ドイツ語の動詞統語論 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	覚知, 頌春
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15531号
Issue Date	2023-03-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89551
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Nobuharu_Kakuchi_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文題名

低地ドイツ語の動詞統語論

・ 本論文の観点と方法

本論文は、ドイツ語圏北部で用いられる低地ドイツ語の動詞構文に関する研究であり、最も有力なシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の北低地ザクセン方言を分析の対象としている。論述の範囲は、低地ドイツ語の発達と現状、北低地ザクセン方言の動詞形態論の概略、doon-迂言形と西ゲルマン諸語の対応表現および疑似並列についての考察に及んでいる。現地でのインフォーマント調査、アンケート調査、コーパス調査を踏まえ、他のゲルマン諸語との比較を織り交ぜて、従来、看過されてきた日本の低地ドイツ語研究の不備を補う成果となっている。

・ 本論文の内容

本論文は全5章から成っている。第1章では、低地ドイツ語の歴史と方言区分、「ヨーロッパ地域言語・少数言語憲章」に地域言語として認められた経緯、教育・研究機関での実践、社会的活動について解説している。

第2章は、北低地ザクセン方言の動詞の形態に関する記述であり、次章以下への前提的知識を提供している。具体的には、弱変化動詞、強変化動詞、話法の助動詞、完了形、受動態、時制、モダリティー、アスペクトを扱っている。

第3章～第5章は本論文の中核をなす部分である。

まず、第3章は、英語 (engl.) の *do*、ドイツ語 (=標準ドイツ語 *dt.*) の *tun* に対応し、不定詞を支配する助動詞ないし代動詞として用いる北低地ザクセン方言の *doon* をめぐる考察である。*doon*-迂言形の用法は *engl. do* による対応表現とは大きく異なり、*dt. tun*-迂言形とも一致しない。また、その使用は義務的ではなく、十分に文法化していない。*doon*-迂言形の機能は進行相、非現実モダリティーの表現手段とされることがあったが、主強勢が文末から3音節目に置くことを好む「強弱弱」の韻律構造の実現手段とする意見も出されていた。申請者は自ら採取した複数のテキストの用例をもとに、アスペクトとモダリティーの関与ではなく、「強弱弱」の韻律構造の実現が本質的であることを確認した。そして、*doon*-迂言形の使用頻度が副文 (=従属文) 中の過去形、それも強変化動詞よりも弱変化動詞で高いことに注目した。その上で、ゲルマン語の弱変化動詞過去形を特徴づける歯音接尾辞 (*engl. -ed/dt. -te*) が北低地ザクセン方言で徐々に失われた過程を19世紀と20世紀の複数のテキストの比較から検証した。中低ドイツ語期以後の北低地ザクセン方言では、歯音接尾辞と語幹末母音の消失で定動詞の「強弱弱」の韻律構造が一部で1音節に縮約され、現在形と過去形の区別も部分的に不明確になった。申請者は、この不備を解消するべく、基本語順がOV型の同方言では、「不定詞+*doon*」の語順を示す副文を中心に、「不定詞+*doon* の活用形」が以前の韻律構造と歯音接尾辞の復元手段として多用されるようになったとする結論を導いた。過去形の形成が母音交替による強変化動詞での *doon*-迂言形の使用は、弱変化動詞との類推によるとみなされる。さらに、この場合の *doon* の過去形は、ゲルマン祖語の歯音接尾辞が過去形 *engl. did/dt. tat* にあたる語形の動詞語幹への接語化に由来するという説を想起させる。「不定詞+*doon* の活用形」は1つの音韻的語を成しており、この場合の *doon* の活用形は半接尾辞の性質を有すると考えられるために、屈折語尾への文法化への途上にあるとみなされる。さらに、申請者はこれとは異なる出現位置と語形を示す上部ドイツ語方言の *tue*-迂言形と比較することで、

北低地ザクセン方言の doon-迂言形の特徴を浮き彫りにしている。一方、近年の標準ドイツ語の影響から doon-迂言形の文法化が妨げられる可能性にも言及している。

第4章では、西ゲルマン諸語と中部および上部ドイツ語方言での doon-迂言形の対応例を詳細に検討している。すなわち、doon-迂言形の対応表現はオランダ語、西フリジア語、非公式のドイツ語には存在するが、不定詞が前域（主文の文頭）に置かれて話題化・焦点化された構文での使用に限られる。ドイツ語では、17世紀の文法家による規範化によって tun-迂言形が文章語で排除された伝統が尾を引いている。ルクセンブルク語とアフリカーンス語には、doon-迂言形の対応表現は見られない。一方、中部ドイツ語諸方言の辞書・文法書には、その対応表現による多彩な用例が記載されており、近世の文法家による規範化が及ばなかった事情を示唆している。上部ドイツ語でも、バイエルン方言、スイスドイツ語ベルン方言・チューリヒ方言、アルザスドイツ語にほぼ共通して、前域での話題化・焦点化構文、接続法、習慣相・進行相のアスペクト表示、命令文での語調緩和などの用法が確認できる。申請者は、低地ドイツ語北低地ザクセン方言が接続法を失い、過去形を保持し、逆に、中部・上部ドイツ語の当該方言が接続法を保持し、過去形を失ったために、doon-迂言形とその対応表現がそれぞれの語形的欠落を補填する役割を部分的に担っていると主張している。このように、低地ドイツ語と中部・上部ドイツ語の主たる相異点は、それぞれの構造的特徴の差に求められることになる。

第5章では、並列接続詞で結ばれた2つの文中の動詞が同じ文法的形態を共有しながら、単一の出来事を表す疑似並列と呼ばれる構文について、アンケート調査に基づいて論じている。北低地ザクセン方言では、並列接続詞 un (engl. and) で結ばれた2つの文の後続文が先行文に対して従属的意味を表すことがある。これには、始動相・進行相・継続相のアスペクト動詞に続く場合と、versöken「～しようとする」のように2つの文の間の時間的継起性が希薄な動詞の目的語の場合が含まれる。一方、終了相アスペクト動詞に続く場合と不在構文、それに planen「～することを計画する」のように2つの文の間の時間的継起性が顕著な動詞の目的語の場合には、容認度が低くなる。一方、スウェーデン語とアフリカーンス語の疑似並列は、低地ドイツ語よりも先行文の動詞の種類が多く、スウェーデン語では姿勢動詞、移動動詞、主語制御動詞、目的語制御動詞も含まれる。アフリカーンス語でも姿勢動詞、移動動詞で疑似並列が見られる。目的語の取り出しの可否も併せて、両言語の疑似並列は文法化の程度が高い。これは、スウェーデン語では並列接続詞 och [ɔ] が同じ発音の補文標識 att [ɔ] との類推で補文標識に再分析され、アフリカーンス語でも先行文と後続文の動詞が1つの複合体をなす CI (complex initial) と呼ばれる現象を示すことと関係があると考えられる。一方、engl. and にあたる並列接続詞で結ばれた並列構造は、一般に単なる2つの出来事の列挙だけでなく、同時性、継起性、論理的関連性などの多義性を内包しており、したがって、意味的に従属構造に近づく現象を示すのは自然である。上記の北低地ザクセン方言の疑似並列の可否も、この事実によって説明できる。申請者は、低地ドイツ語北低地ザクセン方言の疑似並列はスウェーデン語やアフリカーンス語とは異なって、並列構造に内在する多義性に基づいており、文法化の進展とは一線を画する領域で成立している現象であると述べている。